
恋にとどくまで～梨々の恋

折原 奏

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

恋にとどくまで〜梨々の恋

【Nコード】

N3126C

【作者名】

折原 奏

【あらすじ】

高校生の中原梨々は、6歳年上の桜井涼に片想いをしている。社会人の涼に、梨々の想いはなかなか伝わらないけれど、負けずに前向きに恋を手に入れようと頑張る梨々の、積極的なラブストーリー！。

1 s t e p (前書き)

前作、「宇宙いっぱいのお愛」で、その後のリクエストが多かった涼が大人になって再登場。

梨々の想いは涼へ届くのでしょうか。

1 step

高二の11月、両親が離婚した。

若いときに結婚したから、早くに働き始めた父は、他の人よりも頑張らないと出世も出来ないからと言って、ひたすら仕事に打ち込んでいた。

だから母は淋しかったんだろう。他の男と逃げた。

梨々について行かなかった。と言うより、連れて行ってもらえなかった。

梨々がついて行ったら邪魔にされることくらい高校生にもなればわかる。

梨々は父の元に残ることになった。

母の浮気がバレた時、やっと父は母の顔をまともに見ていたような気がする。

だけでももう遅かった。

もっと早く父が母に優しい顔を向けてあげていたら、母は他の男なんか見なかったかもしれないのに。

だからって、父だけのせいでもないと思った。

若いときに結婚したのは、梨々が出来たせいだ。

二人でエッチして、二人で梨々を産むって決めたくせに、父だけが悪いと決めるのはおかしい。

でも、浮気をされた父を、可哀相なんて思わない。

母だけじゃなく、梨々だって父にほつたらかされていたんだ。

父が仕事に打ち込んだのは、母と梨々の生活のためだと思っけれど、結局仕事と家庭のバランスがうまく釣り合っけなかつたからこっうなつたんだ。

大人のくせに、ふたりとも何を考えてるんだろう。

二人で梨々をほったらかした。

二人とも、自分のことしか考えてない気がした。

そして結局。

父は前以上に仕事にのめり込んで行った。

父は、生活のために働いているんじゃないと思った。現実から逃げただけだ。仕事に打ち込むことで、嫌なことから逃げているんだ。

梨々のことなんか、まるで見えていないように無関心だ。

父も母も、梨々が出来なければって思っていたかもしれない。

梨々が産んでって頼んだわけじゃないのに。

12月のある土曜日。

梨々は友達の高野^{たかのいちか}莓花と、ファミレスのランチを食べに行った先で、クラスメイトの伊沢^{いさわやまと}大和に偶然出会った。

「一緒に食おうぜ」

大和に誘われて、同じテーブルで食べることになった。

梨々は、大和の前に座っていた人が、大和の隣に移動するのをじつと目で追った。

カツコイイ人だなー。

ずっと見ていたら、その人が気付いて笑った。

「大和、紹介しろよ」

「ああ、同じクラスの中原梨々と、高野莓花。こっちが……」

大和がカツコイイ人を紹介してくれる。

「中学の時の先輩で創樹^{そつぎ}さん」

それぞれによろしく、と挨拶をかわして席に落ち着いた。

大学二年生の創樹さんは、ホントに見れば見るほどステキな人だった。

いいなあ、あんな人が彼氏だったら……。

そう思っていたのに、ファミレスを出たとき、創樹さんに誘われたのは、莓花のほうだった。

「いいなあ、莓花」

梨々は大和に本音を漏らした。

「創樹さん彼女いるんだぜ。全然良くねーし」

大和が呆れたような声を出す。

「えーっ、彼女いるのに莓花を誘うなんてっ！」

母の不倫を見て、梨々は浮気に人一倍敏感になっていたのだ。彼女がいるのに。

梨々の熱は一気に冷めた。それどころか創樹を軽蔑してしまう。

「俺、相談する人、間違えたかもしれない」

「相談？」

二人で並んで歩きながら、梨々は大和を見上げた。

「うん。創樹さんに女の子のことで相談していたんだ」

「女？ あ、大和、好きな子いるんだ？」

「そーゆーこと」

大和は目をそらしながら、ちよっと照れ臭そうに言った。

「誰？」

梨々は興味津々に大和に聞いた。

「誰だつていいじゃん。つつーか、送るよ」

素直には白状してくれない。

大和は顔を赤くして、先に歩いてゆく。

「告んないの？」

梨々は後を追いながらさらに聞いた。

「今告つてもどうせダメだと思っし。今はまだ言えねー」

「ふうん。慎重なのね」

「うるせーな、行くぞ」

たぶん照れ臭いんだと思う。大和は梨々を置いて、一人ですたすたと歩いてゆく。

「どこ行くの？」

「帰るんだよ。送っていく」

大和とは、あまり話したことがなかったけれど、こうしていると意外と楽しい。

大和はクラスの中では目立っているほうで、見る限り悪いやつじゃないって思う。

クラスメイトと学校外で会うのって、何だか不思議な感覚だ。

初めて見た私服は、オシャレだしカッコイイ。

今日だけで、一足飛びに親しくなれたようで、梨々は嬉しかった。

次の日は日曜だったので、九時まで寝ていた。

父は昨夜、夜中に帰って来ていたようだが、梨々が目覚めたときにはもういなかった。

日曜なのに仕事に行っただ。

でも、こんな日常茶飯事なんだ。いつものこと。別になんとも思わない。

お昼頃になって、莓花が遊びに来た。

「昨日、創樹さんとエツチしちゃった」

まるで、おはようの挨拶をするくらいの気軽さで、莓花は梨々に教えてくれた。

「創樹さんね、私のこと超可愛いって言うてくれたのっ！」

「付き合ってたってこと？」

「まだ。彼女いるから今は無理なんだって」

「彼女いるのに。いいの？」

「うん。ってゆーか、彼女とはもう冷めてるんだって。だからもう

すぐ別れるから待っててって言われたんだー」

「梅花は嬉しそうに笑って言うけど、それって不倫しているオヤジが、愛人に言うようなセリフじゃん。」

「創樹さんに一目惚れだったんだもん。信じて待つことにするの。好みのタイプだし、手放すには惜しいんだもん」

一目惚れかあ。

確かに顔はかっこ良かった。でも、彼女がいるのに他の女に手を出すなんて、軽すぎ！

梨々だったら信用出来ないと思った。

「梨々は？」

不意に梅花に聞かれた。

「何？」

「何って、大和のことよ」

「大和のこと？」

意味が分からず、梅花の言葉を繰り返す。

「昨日、大和とどーなったのよ」

興味津々な目つきで、にやにや笑いながら梅花が梨々の身体をつつく。

「どうもなってるないよ」

「えーっ！ どうもなってるないのー？ どうにかなれば面白かったのー」

つまんなそうに頬を膨らませられたって困る。

梅花には時々、ついて行けない。

彼氏の替わるサイクルが早くて、次から次に気が変わるのを、目の当たりにしてきた。

熱しやすく冷めやすい。典型的な性格だ。

梅花みたいにくまなく巡って来たチャンスを生かしていれば、梨々も今頃、彼氏いない歴十七年に、ピリオドがとっくに打てるはず。

梅花だったら、昨日大和とどうにかなっていたのかな。

梨々は何とも思ってたなかった人を、いきなりそういう対象になん

が見れないから無理なんだ。

一応、片想いはしたことがある。
実は今も密かに憧れている人がいる。

けどいつもみたいに思うだけで、きつとすぐに散ってしまうんだらうな。

梨々、アプローチの仕方がわからないから。

相手から告いわれればいいけれど、そんな都合良いことは現実にはなかなか有り得ない。

莓花みたいに誰が見ても可愛ければ、言い寄られることも多くて、チャンスがたくさんあるんだらうけど、梨々は誰が見てもって程じゃないと思う。

自分の顔もスタイルも嫌いじゃないけど、自信があるって訳でもない。

胸が大きい莓花といると、嫌でも比べられて落ち込む。

翌日の放課後、一緒に帰ろうと大和に誘われた。

断る理由がないので、梨々は大和と一緒に帰って、なんでもない世間話とか、クラスメイトの噂話で盛り上がった。

梨々はいつものまにか大和と一緒にいることが多くなって、だんだん仲良くなっていった。

恋にとどくまで～梨々の恋

1 s t e p (後書き)

読んでいただいて、ありがとうございました。
少しでも面白い、続きが気になると思われたら次回も読んでくださ
いね。

2 s t e p

終業式も終わり、明日から冬休みと言う日、莓花が暗い顔をして声をかけてきた。

「クリスマスは彼女と過ごすんだって」

創樹のこらししい。

やめればいいのに、まだ二股され続けている。

莓花を慰めるために、大和も一緒にファーストフードの店に来ていた。

「いつになったら別れるんだろ。冷めてるって言うてるくせに、何で彼女優先するんだろ」

食欲もないらしく、注文したシェイクをぐるぐるかき回したり、ポテトを指で挟んでは戻したりしている。

「彼女と別れるってのは、ホントらしいよ」

大和が言った。

「ホント？」

莓花が席を立って、身を乗り出すようにして大和に詰め寄る。

「ん……。創樹さんが言うには、彼女って他に好きな男がいるらしいんだ。それに……」

「それに何っ！」

莓花の勢いに、大和は身を引きつつ言った。

「いや。何でもねーし。ってゆーか莓花、創樹さんのこと本気なら、待っててもいいんじゃないかと思う」

たぶん大和は、創樹のホントの気持ちを知っているんだと思った。待っててもいいって言うことは、莓花にも可能性があるってことだと思った。

まあ、梨々の考えだから確信はないけど。

梨々は、梅花が帰ったあと、大和とカラオケにでも行こうかと思っていたが、大和も友達と約束があるからと言ったので、しょうがなく一人で帰った。

「つまらないな」

家に帰っても暇なので、雅人のいる会社に行ってみた。

雅人は、父の弟だ。梨々にとっては叔父さんにあたるひと。

最近ずっと大和と遊んでいたから、雅人に会ってなかった。

久しぶりに事務所のドアを開けると、中はガランとしている。

イベント会社だから、社員は現地に行っていて、昼間はいつだってこんな感じ。

びっくりすることじゃない。

雅人は主任室にいるはずだ。

「雅人さーん」

ドアをノックすると同時に開けて、梨々は中を覗きこんだ。

「お邪魔します」

「ああ、梨々か」

雅人は梨々に気付くと、優しく笑った。

「梨々ちゃん、久しぶり。大きくなったな」

雅人と一緒にいたのは、桜井涼さん。

雅人の大学の後輩で、そしてこのイベント会社の社員でもある。

年は確か23歳。

今まで何度も会ったことがあるけれど、梨々のことをいつも子供扱いする。

初めて涼に会ったのが、中学に入学したばかりの頃だったから、その時のまま、梨々の印象が残ってるのかもしれない。

実は彼が梨々の憧れの人。

かっこ良くて、背が高くて大人っぽいんだ。

「梨々は夏から3センチ伸びましたっ」

「成長期だね。いいね、若くて」

6歳も年の差があれば、そう思われてもしょうがないのかもしれないけど、そう言う言い方ってバカにされているような気がする。

「明日から冬休みなんだから？」

雅人が聞いた。

「うん」

「いいなー、学生は。社会人には冬休みがないもんな」

雅人がしみじみとした口調で言う。それを受けて涼が聞いた。

「せっかくの冬休みなのに、遊んでくれる彼氏とかいないの？」

「何言ってるんだ、涼。最近の高校生は進んでるとか言うけどな、梨々はそんなんじゃないんだ。暇でこんなところに来るくらいなんだから」

彼氏がいなくて暇だと思われるのは癪だったが、涼に彼氏がいないことを知ってもらうのは良かった。

「そうなの。暇なの、遊んで？」

甘えるように涼に言ってみる。

「工作中だよ」

あっさり却下される。

「仕事すんだら遊んで」

「デートだよ」

即効、失恋だった。

確か、夏休みがすんだ頃、彼女に振られたと言ってたはずなのに。もう次の彼女がいるのか。

涼を知ってから今日まで、涼に彼女がいなかったことがない。

こんなにカッコイイんだから、モテるのは分かる。

でも、会うたびに彼女が変わってるんだ。

熱しやすく、冷めやすいタイプなのかもしれないと梨々は涼のことを分析している。

「つまらないな。じゃあ明日は？」

「明日こそ無理だろ」

明日はクリスマススイブだ。しょうがないか。

「はあ、つまんないな。出会い系サイトで誰かと出会おうかな」

そんな気もないくせに言ったら、雅人に怒られた。

「危ないことはするなよ」

「しないよ。言ってみただけだもん」

「じゃあいいけど。だいたい梨々が淋しいのは兄貴がほつたらかしてるせいだ。仕事ばかりして、梨々が可哀想だ。非行に走らないのが不思議なくらいだよ」

雅人は大きく息を吐いた。

「非行に走って欲しくなかったら、ちゃんと遊んで」

涼が遊んでくれないなら、雅人でもいい。

「梨々ちゃん、もう高2だろ？ おじさんに甘えてないで、甘えられる彼氏作りなよ」

「余計なこと教えるな、涼。梨々は彼氏なんか作らなくていいからな。僕も時々なら遊んでやれるし」

雅人が梨々の頭を撫でてくれる。

「見てらんねー」

涼が呆れたような目を向ける。

「そんなんじゃないや梨々ちゃんに彼氏が出来たとき、そいつ、殴られるだけじゃ済まねーな」ハハッ」

「殴るかよ。いい奴なら僕だって梨々を任せるさ」

「さあ、どうだか。親バカならぬ、叔父バカだもんな、雅人さんは」
雅人が梨々を大事にしてくれるのは、有難いことだと思った。だけれど、本当にもし梨々に彼氏が出来たら認めてくれるんだろうか。もし、それが涼だったら、雅人は許してくれるかな。

そんなはずないってば。

梨々は心の中で、一人照れた。

まさか涼が梨々の彼氏になってくれるなんて、そんな夢みたいなきっかけが起ころはずがないよ。

結局、梨々は雅人の仕事が終わるまでそこにいて、雅人と涼の仕事の邪魔をしていた。

「じゃあ、お疲れ」

帰り際、去って行く涼の背中に梨々は言った。

「明日、彼女に振られたらメールしていいよ。梨々、遊んであげる」
どうせ本気に取ってはもらえないのだ。

冗談交じりで言ってみたら、

「いいよ。メールする」

冗談っぽく返された。

そう。あれはただの冗談で、本気で涼のメールを待っていたんじゃない。やなかつたはずだったのに……。

翌日のお昼頃、大和が来た。

この前一度、家まで送ってもらったから梨々の家は知られているのはわかってたけど、いきなり来るから髪の毛ボサボサだったし、素顔だったから焦った。

ただの宅急便かセールスかと思ったんだもん。まさか大和とは思わなかったからびっくりしちゃった。

「来るならメールくらいしてよね」

手で髪を梳きながら大和に文句を言った。

「ごめん、そこまで来てたし、いなかったら帰るつもりだった」

「いいけど、別に」

せっかく来たから、大和を部屋にあげた。

梨々の部屋に案内して、その間に着替えて髪を梳かしてから、リップグロスを塗った。

それから冷蔵庫に買い置きしていたジュースを出して、大和と梨々の二人分をコップに注いでから、トレイに載せて部屋に運んだ。

「おまたせ、大和」

梨々の部屋に入ると、大和は梨々のやりかけのゲーム画面をじっと見ていた。

急にインターホンが鳴ったから、ストップしているのだ。

だってちょうどボス戦の途中だったんだ。

「ドラクエしてるんだ？」

「そうだよ、知ってるの？」

「クリアしたよ、これ」

「ウソ。すっごーい」

梨々なんか、今のところを何回もしてるのに、ずっと負け続けているんだ。

「わかんないところ、教えてやろうか」

「わかんないところは、今のところないけど、このボスに4回もやられてんの」

「ああ、こいつらね」

それから大和とゲームを一緒にして、盛り上がった。

クリスマススイブなのに、ドラクエにはまるなんて、色気も何もないけど、夢中になってしまった。

「体、痛ってー」

大和が首をぐるぐる回した。

気付いたら外はすっかり真っ暗になっていた。

「夢中になっちゃったね」

「……うん、あのさ」

不意に大和が真面目な顔を梨々に向ける。

「あのさ、俺、好きな女がいるって言っただろ？」

「うん」

梨々は興味津々で、大和の顔を見る。

大和は、聞いてくれる？ と梨々に確認を取った。

「いいよ。聞く」

大和が恋の悩み相談を梨々に持ちかけてくるなんて。

ちゃんとアドバイス出来るかな。梨々、恋愛経験ゼロだから。

「俺さ、その子のこと、高2になって同じクラスになって……。で

も、俺のことなんか、ただのクラスメイト以上に思われてないんだ

よな」

「誰？」

「それは言えない」

「ええ、言ってくれば梨々も協力出来るかもしれないのに」

「うーん。でもな、言えない」

「そっかー。でも、せつかく大和に想われてるのに、もったいない

な、梨々だったら大和から告白されたら嬉しいのにな」

「梨々……」

「大和っていいやつなのに」

まあまあカッコイイし、優しいもん。

「いいやつかー」

大和は大きくため息をついた。

誰なんだろう。

いいな、梨々も涼からそんな風に想われてみたい。

「あのさ、梨々」

大和の言葉を、梨々のメール音が遮った。

まさか……………。

涼が、ホントに彼女に振られた。

しかも、あんな冗談みたいな約束通り、メールをくれた。

梨々は、大和に急用が出来たからって断ってから、涼の待つ駅前まで急いだ。

続く。

3 s t e p

「で、梨々ちゃんは何して遊んでくれるの？」

梨々は信じられなかった。

涼につれられて、涼の家に来ていた。

これって、夢？

サンタさんが、梨々にクリスマスプレゼントをくれた？

「え、えーと。トランプとか？」

ソファに横並びで座っている。

しかも涼は、ソファの背もたれ部分に、まるで梨々の肩を抱くように手を置いているから、ドキドキが止まらない。

「トランプなんか、つまんねーよ。俺、振られたんだ。俺の目の前でさ、

あいつ他の男選びやがって。指輪なんか貰って喜んでんの。バカにすんなって」

そこまで言うと、涼はハツとしたように言葉を止めた。

「子供に言ってもしよーがねーな」

こんな取り乱したような、投げやりな涼は初めて見た。

いつもクールで余裕って感じて笑っているのに、別人みたい。

何かいい慰めの言葉はないかな……。

「梨々ちゃん、今日は何してた？」

梨々が言葉をかけようと思っていたのに、逆に聞かれてドキンとしました。

「大和とゲームしてた」

「大和って誰？」

「クラスメイト。友達だよ」

「ふーん、ごめんね。うちゲームなくて」

「別に謝らなくてもいいよ。ゲームならうちですればいいもん」

せっかく涼と二人でいられるのに、暇つぶしのゲームなんかした

ら時間がもつたいないよ。

「そう？ 梨々ちゃんはクラスの男の子とゲームして遊ぶのが楽しいのかと思っただ。まあ、子供同士だもんな、そういうレベル。ハハハッ」

なんか笑われてムカツときた。

そりゃあ、大人の涼から見れば高校生の梨々は子供かもしれない。だけど軽く笑い飛ばすことないじゃん。

「梨々のこと、バカにしてない？」

「してないよ。可愛いな、初々しいなって感心してたんだ」

「そういう言い方がバカにしてるように聞こえるのっ」

からかいを含んだ涼の言い方に、ついムキになってしまった。

「怒るなら帰れよ。送って行くのか？」

ため息をつきながら立ち上がる涼に、梨々は慌てて謝った。

「やだ。ごめんなさい、まだ帰りたくないっ」

せつかく涼と一緒にいられるのに、こんな喧嘩別れをするように終わらせたくなかった。

「帰りたくないの？ じゃあ、泊まる？」

心臓がきゅんつと鳴った。

それは次第に大きくドキドキ鳴って行って、想像しただけで全身がカーツと熱くなる。

「……うん、泊まる」

勇気を出してうなずいたら、涼が苦笑いを向ける。

「冗談だろ」

「誘ったのは涼だよ。だから梨々、泊まる気になったのに」

涼の目をじっと見つめて、真剣に伝えた。

涼も、梨々の目をじっと見てくれている。

「梨々……涼といたいもん」

「は……ハハッ」

梨々は真面目に言ってるのに、いきなり大声で涼は笑い出した。

「梨々ちゃん、意味わかってんの？ 雅人さんのところに泊まるの

とは、訳が違う」

「それくらい分かるもん。わかるけど、涼にとって梨々は子供なんでしょ」

梨々だって、涼の部屋に泊まる意味くらいわかる。

ドキドキしてるんだから。

ちゃんと涼が冗談で言ってるのも、冗談で流そうとしているのもわかってる。

だけどいいと思ったんだ。涼とならそうなってもいいって思った。

「今日は子供でも、明日には大人になってるかもしれないよー」

涼は、梨々の反応を窺うように、笑った。

「明日には……大人？」

「梨々ちゃん、大人になりたい？」

梨々の顔を覗き込むようにして、涼が笑う。

そんな風に至近距離で見られたら、ドキドキする。心臓が飛び出しそうだよ。

「なりたいたっ」

言うてから、梨々はぎゅっと目をつぶった。

「流されるなよ」

涼はキスをくれずに、素っ気ない言葉で梨々をかわした。

「流されるって……何に？」

ゆっくりとつぶっていた目を開ける。

「梨々ちゃん、こんな雰囲気になんてさ、そういうのは本当に好きなやつにしか言ったらダメだろ。こんな風に簡単に男の部屋に入ること自体、どうかと思う」

これって、やっぱりと拒否されているってこと？

「梨々は……梨々は、涼のこと……」

「梨々ちゃんに、これやるよ」

涼が梨々の言葉を遮り、ポケットの中から小さな袋を取り出した。

「な……なに？」

「クリスマスプレゼント。欲しい？」

「え……、いいの？」

「欲しいならやるよ。ただしそれは彼女にやろうと思って買ったヤツだけだね」

すでにプレゼントの袋は梨々の手のひらの中だ。

涼にもらえるってことは、嬉しいけど。

でも、これは梨々に買ってくれたものじゃない。

彼女の喜ぶ顔を想像して、涼が選んだプレゼントで、梨々が受け取る資格なんかないんだ。

「だけど……」。

「いるわけねーよな、いいよ。捨てる」

涼がプレゼントに手を伸ばした瞬間、梨々はそれを胸に抱きしめるようにして、

くるりと後ろを向いた。

「いやっ、捨てるなら梨々のにするもん」

「梨々ちゃん」

「いいのいいのっ！ 涼が買ったものには違いない。もったいないよ、せつかく買ったのに」

捨てるなんてもったいない！」

しばらく涼は、じっと梨々の背中を見ていたようだ。

背中にチクチクと涼の視線を感じる。背中がむずむずした。

「返せよ」

「やだっ」

「欲しいなら……交換してもらってくるから」

「……交換？」

身体はそのままに、顔だけ涼のほうを振り返る。

「それ、ネックレスなんだ。サイズが合わなかったって言って、交換してくるから。アイツに買ったものをそのまま梨々がつけてんの見るの嫌だし。見るたびに思い出すだろ」

ネックレスにサイズなんか無いと思う。

「ただ、交換してくれるのは、梨々に買ってくれるのと同じことになるかな。」

「うん、違う。」

「彼女のこと、思い出すのが嫌なだけだ。」

「だったらもつと、何か違うものに出ないだろうか。」

「梨々、指輪がいい」

「要求してみた。」

「指輪にして。ネックレスは嫌。これを指輪に交換してよ」

「子供っぽくワガママな素振りですべてみる。」

「指輪はダメ」

「ええーっ、どうしてよー」

「指輪は彼女にしかあげないって、決めてるんだよね」

「……そうなんだ」

「じゃあ梨々を彼女にしてよ、とはあまりに図々しすぎて言葉には出来なかった。」

結局、涼に送られて家まで帰って来た。

何もなかった。

梨々に涼は、結局何もなかった。

部屋に入り、ばたんとベッドに倒れこむ。

「やっぱり、遊ばれてるのかな」

「しかも、子供を遊んでくれてるって意味の遊び。」

「大人の遊びなら良かったのにな。」

梨々は、涼にだったら遊ばれてもいいかも。一回でいいから、涼とキスしてみたかった。

次の日にまた大和が梨々の家に遊びに来た。

「梨々、ヒマなら遊ばね？」

「メチャクチャ暇だよ。いいよ、あがつて」

梨々はまた大和とゲームをして遊んだ。

昨日のように、ふたりで盛り上がっていたら、ふと涼に言われたことを思い出した。

ふんだ。どうせ子供同士のレベルですよーだ。

「ねえ、大和」

梨々が呼ぶと、大和はゲーム画面を見たままの格好で、何？と

返事をする。

「梨々と大和つてさ、男と女なんだよね」

「……え？」

大和が梨々のほうを見た。

「梨々つて、子供っぽいかな」

「いや、どうかな。そんなことはないと思うけど。俺たち同じ年だし」

「部屋に二人きりなのに、変な風にならないのは、梨々に魅力がないから？」

「お、俺たち、友……達だしっ」

何だか大和が……変。

急にどもつて、顔が赤くなった。

「つてゆーか、梨々、変じゃん」

「変なのは大和だよ」

「変……に、なってみようか」

「それつて、どういうこと？」

「梨々……」

大和が手に持っていたコントローラーを置いて、梨々ににじり寄ってきた。

「キスしようか」

「……大和」

すぐそこまで、大和が迫ってきた。

後ろはベッドで、梨々に逃げ場はない。

キスには興味あるし、大和のことも嫌いじゃない。

ま、いいか。

梨々は目を閉じた。

でもすぐ近くに大和の息を感じた瞬間、急に梨々は怖くなった。

「やっぱり嫌っ」

「わあっ」

激しく突き飛ばしてしまい、気付いたら大和はゲーム機に頭をぶつけて倒れていた。

「ああっ、ゲーム機が！」

壊れてないよね。

「ゲーム機のほうが心配かよ」

「あ、ごめん大和」

大丈夫？　と言って大和を助ける。

「ひっでー、その気になった途端、これだもん」

頭をさすりながら、大和がふてくされた。

「だって、梨々……好きなひといるもん」

「じゃあ、誘うなよ」

「誘うってなによ。大和が勝手に変な風に誤解するからじゃん」

「目、閉じたくせに」

それはそうなんだけど。

大和から目をそらす。

「梨々、その気になってただろ」

まるで梨々だけが誘って、その気になってたみたいと言って！

「大和こそ、好きな子がいるくせに」

「それはそうだけど」

せっかくの楽しい時間が、急にきまずくなった。

空気も暗く沈んでしまった。

「帰る。なんか、悪かったな」
大和は、機嫌をそこねたまま帰って行った。

でも、ひとつだけ、わかったことがあった。

梨々もちゃんと男を誘惑できるんだってこと。

大和にキスされそうになって、自信が持てた。

それから年末まで、梨々は誰とも遊ばずずっと一人で過ごした。

31日の夜から、父は祖母の家に行くといったけど、梨々は母花と初日の出を見に行こうと約束しているから、と言う理由をつけて残ることにした。

祖父母と父としかいない家になんか、行っただってつまらないのはわかってる。雅人が帰るって言うなら、梨々もついて行くつもりでいた。だけど、今年は仕事で帰れないって電話で教えてくれた。
「あっ」

梨々は急にひらめいた。

雅人が仕事ってことは、涼も仕事かもしれない。

梨々は早速、涼にメールで聞いてみた。

『31日まで仕事。1、2日は休み』

素っ気ない文章だったけど、涼の予定を覚えてもらえた梨々は、
携帯を胸に抱きしめベッドに転がる。

大晦日の夜を、涼と過ごせるかもしれない。そして、元旦の朝を
一緒に迎えられるたら、どんなに幸せだろうと想像するだけでどうに
かなりそうだった。

4 step

『サンセットホテルでディナーショーの仕事があるんだ』
涼から電話がかかってきた。

「ディナーショー？ 涼って有名人なの？」

『違うよ。ディナーショーに来ているお客さんに、料理や飲み物を運ぶ仕事だよ』

「ウエイター？」

『まあ、そんなところ』

涼の仕事はイベント関係だ。

そんな仕事もするのか。

『明日は最終日だから、9時で終了。その後ならヒマだよ』
「いいの？」

31日の夜に涼と会えることが決まった。

『終わったら家まで迎えに行くよ。ドライブでもする？ カウントダウンの花火が見れるかもね』

「やったー！！」

梨々は嬉しくて、つい大声を出した。

電話を切った梨々は、わくわくとドキドキがすごくて、なかなか眠れなかった。

そして翌日の夜、10時を少し過ぎた頃、約束通り涼が迎えに来てくれた。

「早かったね」

梨々は言いながら車のサイドシートに座った。

「あれ、何かいい匂いがする」

車に乗った瞬間、ふわっといい匂いが香った。

「ああ、後ろのシートに花があるから」

梨々が振り向くと、シートに花束があった。

「ディナーショーの会場に飾ってあったやつなんだ。捨てるってゆ

「から貰ってきた」

「ふうん……」

欲しいな、花束。

そう思っていたら、ちゃんと涼のほうから言ってくれる。

「梨々ちゃん、いる？」

「いるっ！」

涼は笑いながら、後部シートから花束を取って、梨々の目の前に差し出してくれた。

「ありがとう。枯れるといけないから、梨々一回戻って花瓶に入れてくる」

まだ車は発車していない。

梨々は車を降りると、花束を抱えて家に入った。

嬉しい。

涼が梨々のために貰ってきてくれたんだと思うと、このまま空に飛んでいっても不思議じゃないくらい舞い上がってしまった。

「花瓶は……」

「ごそごと物置を探った。」

普段、花なんか飾る習慣がないから、花瓶なんかどこかへしまっ
たきりだ。

「ああ、わかんないや」

そもそも、うちに花瓶があったかが疑問に思ってきた。

しょうがないので、梨々は洗面所にあったバケツに水を入れて、
その中に花を入れる。

「あーあ、せつかくの涼の花がバケツなんか……」

すぐに花瓶を買ってきて、入れ替えよう。

花も気になるが、涼をいつまでも車で待たせておくほうが、もっ
と気になる。

急いで外に出て、鍵を閉め、振り返ったそこに……。

「ウン……」

涼の車のそばに、雅人の姿があった。

涼と何か話しているようだけれど、どう見ても楽しい話をしてい
るようには感じられない。

近づくことが出来ずに立ったままで見ていると、やがて雅人が気
付いてこっちを振り向いた。

「梨々」

すぐにごつちに向かって歩いてくる。

眉間にしわを寄せて、梨々をじっと見てる。

怒ってる？

「兄貴に、梨々がひとりであるから様子を見てくれて頼まれたん
だ。梨々はこんなことをするために残ったのか？ 莓花ちゃんと初
日の出じゃなかったのか!？」

莓花との日の出は残るための口実だった。

梨々は答えられずにうつむいた。

「雅人さん」

涼が車を降りて、梨々と雅人のところまで来ようとしている。

「うるさいっ、涼は関係ない。帰れっ」

雅人は涼を怒鳴りつけ、追い返した。

「いや、雅人さん。何か誤解……」

「いいから、帰れって言ってる」

涼の言い分も聞く耳持たないって様子で、雅人が涼を突き飛ばす。
しばらく涼はどうしようか迷っていたようだけれど、

「ごめん、梨々ちゃん」

謝ってから、車に乗って帰ってしまった。

「とにかく中に入りなさい」

無理やり家の中に入らされて、リビングのソファに座る。

雅人は、涼にもらった花束に目を向けた。

「涼にもらったのか？」

「……うん」

「梨々、僕に隠れて涼と会っているのか？」

「隠すつもりもないし、了解とる必要もないと思う。雅人さんがどう思ってるかわからないけど、ただ遊んでもらってるだけだもん！変なことないもんっ、涼はいい人だし！」
梨々は頬を膨らませた。

「確かに涼はいい奴かもしれない。だけど、男だろ？ どんなきっかけで間違いが起こるか……」

「梨々、子供だから大丈夫なのっ」

「いい加減にしなさいっ」

雅人がテーブルをバンツと叩いた。

びつくりして梨々は言葉を失くしてしまう。

「僕からみれば梨々は子供でも、世間の男たちから見れば、17歳は十分大人だ」

それ以来、雅人は梨々を見張るように、うちに泊まりこんでいる。ドライブもカウントダウンの花火もなくなった。

いくら叔父さんでも、梨々をこんな風に束縛する権利はないと思う。

ムカムカする。雅人が嫌いになってきた。

2日の朝も雅人と迎えてしまった。

明日には父が帰って来る。

せつかくの涼と一緒に、楽しいはずの日々を、雅人と過ごしてしまった。

少し前なら喜んだかもしれない。

少し前なら、梨々の一番は雅人だったんだから。

夕方になって、大和がきた。

どうして涼じゃないのよ。

「梨々。あの、これ……」

大和は玄関先で、紙袋に包まれたものを梨々の前に差し出す。

「家族で旅行に行ったんだ。梨々に、お土産買ってきたから」

「梨々に？」

大和の手から、お土産を受け取りながら聞いた。

「あ、この前なんか気まづくなってお詫びってゆーか。でも、苺花にも買ってきたんだ。ついでに渡しといて」

それだけ言うと大和は「じゃあなっ」と言っつて、逃げるように帰っていった。

梨々は手の中のお土産を見つめた。

梨々ののはともかく、苺花には苺花に直接渡せばいいのに。リビングに戻るとすぐに雅人に尋ねられる。

「付き合ってるのか」

「え？」

「今の男の子は誰だ？」

雅人ったら、こっそり覗き見してたのね！

「いいじゃん、誰でも」

「彼氏はいないんじゃないの？」

「彼氏？」

それって、大和のこと？

「梨々は、彼氏がいるのに涼とも遊ぶのか？」

「っ……悪いのっ？」

素直に言えなかった。訂正するのも面倒臭い。

「大和と涼は違う存在だもん。涼とエッチするわけじゃないんだし、遊ぶくらいいいじゃんっ」

あー、ムカツク。

「もうほつといてよ。梨々もう子供じゃないんだからっ」

「自分で子供だって言わなかったか？　ったく、子供じゃないなら尚更心配だろう」

「なによ、自分だって女の子とエッチするくせに！　梨々だってしたつていいじゃん！」

雅人は見る間に顔を曇らせた。

黙ったまま梨々を見ている。何も言い返してこない。

言い返せないんだ、きつと。

「……わかったよ。悪かったな。干渉しすぎた。梨々は子供じゃない。自分で考えて好きないようにすればいい」

雅人は梨々に背を向けると、そのまま家を出て行ってしまった。

「……何よ……」

突き放されたんだ。

梨々のこと、呆れちゃったんだ。

「いいもんっ。好きにするもん」

梨々は追い返されるのを覚悟で、涼のところへ急いだ。

「雅人さんから聞いたよ。好きにしるって言われたんだって？」

玄関を開けるなり、涼は梨々にそう言った。

「だから来たの」

「何で俺なの？」

「何でって……」

「他にいるんだろ？　大和くんだけ。あいつと遊べばいいじゃん」

「梨々……涼がいいんだもん」

「雅人さんから、散々釘を刺されたんだよね、梨々ちゃんに構うな
って」

「涼は、雅人さんの言うことに逆らえないの？」

「そういうんじゃないけどさ、梨々ちゃん、大和ちゃんと付き合っ
てるんだろ？ 俺のとなんか来ちゃダメだよ」

「雅人さんが言ったのね！ ムカツクあいつ！」

涼には早く訂正しておかなければ……。

「大和とは」

「俺や梨々ちゃんが、単に遊んでるだけだって言ったって、そっ
うの大和さんに知られたらやっぱ、嫌だと思っよ」

「だから大和は」

「付き合ってる奴がいる時は、そいつしか見てなきゃダメだ」

梨々が弁解するスキを与えないくらい、涼は素っ気なく梨々をか
わす。

「梨々のこと、嫌いななの？」

「そういう問題じゃないだろ」

「梨々は涼が好きなのにつ」

涼はあからさまに困った表情を見せる。

「涼と付き合いたい」

「……それ、本気で言ってるの？」

「ずっと懂れてたんだから。やっと遊んでもらえるようになってき
て、嬉しいんだから。涼から見れば、梨々なんか子供過ぎて相手に
したくもないかもしれない。けど、しょうがないじゃん、好きにな
っちゃったんだから」

まさか今日、こんな形で告白するなんて思ってたなかった。

こないきなり、しかも言っつもりがなかったから、うまく言え
ていない。支離滅裂の告白だ。

涼は戸惑っているのか、呆れているのか、何も言っはくれない。

「大和はどーすんの？」

「大和は……遊んでるだけだもん。勝手に大和が来るんだから、梨々は何とも思ってたないの」

「ふーん。そーゆー女、過去にいたなー。大和が可哀想」

「大和は……可哀想じゃないよつ。付き合ってたないんだよ。ただの友達だからっ……」

「友達ねえ……」

ため息混じりに涼がつぶやく。

「梨々ちゃんはそうでも、大和はそうじゃないかもよ」

「そうじゃない？」

「相手の気持ちも考えてやんなきゃな」

「じゃあ、涼だって、梨々の気持ちを考えてよ！」

梨々は大和と違って、ちゃんと涼に気持ちを伝えただ。

大和の気持ちより、梨々の気持ちを考えて欲しい。

「梨々ちゃん、俺が好きなんだって言ったよね」

「うん、言った……」

「そう言ってくれる気持ちは嬉しいよ」

「涼……」

「って、言っちゃったら満足？」

クラツとした。

「俺が好きなら、大和なんかと遊んでんじゃねーよ。部屋にあげんなよ」

涼は梨々から、ふんつと目を逸らす。

「ホントは誰でもいいんじゃないの？」

「そんなことは……」

「俺、梨々ちゃんのこと、好きになんねーよ。それでもいいなら付き合おうか？」

涼の言葉に、梨々の思考回路は混乱した。

付き合おうか？

付き合ってくれるってこと？

……違う。

好きにならないって言われた。

涼は、梨々を100%拒否したってことだ。

それでもいいから、付き合っただけいいとは、さすがの梨々も言うことが出来なかった。

結局、今日も家まで送ってこられた。

でも、追いつかれないだけ、マシだと思った。

帰って言って、目の前でドアを閉められなかっただけいいじゃん。

ちゃんと車で送ってくれる涼は、優しい人だ。

「なんだかわかんないよ……」

呟くとともに、枕に顔を埋める。

本当に梨々のことが迷惑なら、ほったらかすと思う。もう来るな
って怒ると思う。

言葉は素っ気ないけれど、態度は優しい気がする。

これって、梨々のいいように考えすぎなんだろうか。

単に、梨々は雅人の姪だから、ひどく扱えないだけなのかもしれ
ない。

続きます。

5 step

冬休み最後の日、また大和が来た。

「ヒマ？」

「ヒマで悪かった？」

遊ぶ相手もないのかよって、言われているようでムツとして、つい、言葉に棘を含んでしまう。

「悪くないけど、この前大変そうだったから気になって」

「ああ、雅人さんのことね」

「梨々の背後に、怖い顔して立ってたじゃん、誰？」

雅人、梨々の知らないうちに大和を睨んでたのね！

「叔父さんだよ、梨々の。梨々が悪いことしないように見張られてたの。でも、怒らせちゃったからもう帰ったよ。好きにしろって言われちゃった」

「なんか、訳あり？」

良かったら聞くよ、って大和が言ってくれる。

「うん……じゃあ、あがつて」

梨々は大和を部屋に入れた。

「梨々、好きな人がいるって話したよね」

目の前に座る大和をチラッと見て反応を確かめる。

「うん。聞いた。恋の悩み？」

大和はちゃんと真摯な態度で梨々の話を聞いてくれる。

「好きって伝えたんだよ。だけど、好きにならないって言われたの」

「ヤバッ……。思い出したら泣きそうになってきた。」

「なんだよそいつ。梨々が真剣に告白してんのに、そーゆー言い方すんの？ 最悪」

露骨に嫌そうな表情を浮かべる。

「最悪でも……好きなんだもん」

「そっか。ツライよな」

「そう言う大和こそ、好きな人とどうなってるの？」

同情されると泣き出してしまいそうだったので、梨々は話を大和に向けた。

「ああ、俺も同じ。好きなやつには好きな男がいるんだよ」

「大和もツライんだね」

「梨々もね」

はあああ……。と、二人で同時に大きなため息を落とした。

「大和は告白したの？」

「しねーよ。振られるのわかってるのに」

「じゃあ、言わないつもり？」

「まあ、忘れられないなら、折を見て言うかも。でも今の段階では100%不可能だしな、言わない」

「梨々も100だよ」

しばらく二人でため息ばかりついていたら、先に大和が立ち直った。

「ゲームの続きでもする？」

「そうだね、しよう」

「今どの辺？」

「なんとか都市ってところ」

「ああ、わかった。あそこね」

ゲーム機をセットしてくれる大和の横顔を盗み見た。

大和は優しいと思う。

話も合う。

顔だって、梨々の好みじゃないけど、たぶんカッコイイ部類なんだと思うし……。

「ねえ、大和の好きな子って誰？」

気付いたら口に出していた。

「え……」

動揺した様子の大和に、さらに聞いた。

「クラスの子なんでしょ？ 梨々も知ってる子だよな？」

「……うん、知ってる子」

大和は小さくうなずいた。

「誰？」

「言えない」

「言つてよ。梨々だって涼のこと教えたでしょー」

「それとこれとは別問題」

大和は意地でも言わないつて言つて、梨々に背を向け再びゲームに集中している振りをした。

「ケチ」

「ケチでいいもんね」

「……涼が言つてたよ。大和は梨々が好きつて」

なんて、そうハッキリとは言われてないけれど。

「ふーん。なんでそいつに俺の気持ちかわかるわけ？ 勝手に想像されても困るんだよな」

大和は梨々に背を向けたままだから、どんな顔をして言っているのかはわからない。

「大和。ねえつたら」

「うるせーな。莓花だよっ」

「は？」

「梨々が言えつてゆーから言ったんだからな
莓花？」

「大和は、莓花が……好きなの？」

「悪いかよっ」

「……悪くない、けど……」

意外だったんだ。

大和が莓花を好きだなんて、まったく気がつかなかった。

梨々ったら大和に好かれてるかもしれないなんて、自惚れもいいところだった。

「でも、今はちよつと違って……その、梨々と過ごしてるうちにだ
んだん俺」

大和の言葉を遮るように、梨々の携帯が鳴った。

『梨々？ 今ヒマ？』

大和の言葉を邪魔したのは、莓花だった。

『駅前にいるの。出てきなさいよ。シーモールで物産展があつてる
の。すっごいカッコイイお兄さん見つけたの！。見に行こうよ』

「あ、でも今……」

梨々は大和を振り返る。大和は不機嫌そうに立ち上がった。

「俺、帰るし」

「あ、ごめん大和」

『あ、ごめん大和。って、梨々と大和のいいところ、もしかして私、
邪魔しちやっただ？』

電話の向こうの莓花は、ごめんねー、なんて謝っているけれど、
声が笑っている。本気で悪いとは思っていないらしい。

『梨々ったら、大和程度で手を打ってないでさ、行こうよ。ホント
にいい男なんだってば』

「じゃあな。バイバイ」

ああ、大和が出て行ってしまった。

梨々は蓼花に「すぐ行く」と、とりあえず返事をしてから、大和を追いかけた。

「大和、待つて。帰るなら駅まで一緒に行こうよ」

大和が梨々を振り返る。

「誰かと約束したの？ 例の好きな奴？」

「ううん、蓼花。だから大和も一緒に行かない？」

「行かない」

素っ気ない大和の答え。

「誘われたの、梨々だろ？ で、梨々は俺といるより蓼花の誘いに乗ったんだ。俺なんかいなくてもいいじゃんか」

「何か、怒ってるの？」

それとも拗ねてる？

大和は不機嫌なまま、梨々の質問に答えないままどんどん先に歩いていく。

「……もう、知らない」

梨々はその場に立ち止まった。

だんだん大和との距離が遠くなるけれど、大和も梨々を待つてはくれなかった。

そして大和の姿が点になった頃、梨々はゆっくり歩き始めた。

「あ、梨々！」

駅に着くと、蓼花が大きく手を振りながら梨々に向かって走ってきた。

冬だって言うのに、大きく胸元の開いた洋服を着ているから、大きな胸が揺れ揺れなのが目立つ。

「今日までなのね、物産展。地方の特産品を集めて販売してるらしいの」

「シーモールと言うのは、この辺では大きいショッピングセンターだ。」

「8階の特設会場では、様々なイベントが定期的に行われている。」

「この前、創樹と行ったんだよね」

「シーモールに向かって歩きながら、莓花が説明してくれる。」

「物産展なんか、つまらないって思ってたんだけど、商品以上に見がいのある人を見つけたわけよー」

「莓花は、創樹とのデート中に、他の男に目が行くような女の子なんだろうか。」

「気が多い子だし、あり得るかもしれない。」

「エレベーターで8階まで着くと、すぐに莓花が指を指す。」

「ほら見て、梨々！ あそこの沖縄のお酒を販売してる人！」

「莓花の指を辿って行き着いた先にいたのは……。」

「あ……涼」

「え、涼って……？」

「莓花が梨々に聞いた。」

「ほら、梨々が言ってた、梨々の好きなひと」

「ええっつ、あれが涼？」

「どうやらこの物産展は、雅人の会社参加のイベントだったらしい。手広くやってるな、と改めて感心する。」

「やっくん、梨々。もつと頑張りなよ。大和なんかと遊んでないでさ、もつと強引に迫りなさいよ。大人じゃん、社会人だよ。しかもカッ

コイイし。梨々がいらなら、私が行っちゃおうよ」

「莓花、創樹さんがいるじゃん」

「創樹？ ああ、そんな男もいたわね」

「急にわざとらしく、莓花が遠い目をして見せた。」

「まさか、もうあきたって言わないよね？」

「彼女とついに別れたのね。莓花だけだよって、言ってくれたのは

いいんだけどさ、何かうざったくなっちゃった」

「ウザイの？」

普通だったら、自分オンリーになってくれたら嬉しいんじゃないかな。

「エッチが下手なの」

「……下手なの？」

「最悪なの。自分勝手なのよ。ダメね、やっぱり大人の男じゃないや快感得られないんだもん」

梨々は未経験なので、口を挟めなかった。

下手とか最悪とかわからない。ましてや快感なんて言われたってさっぱりだった。

「梨々、会って行くでしょ？」

「え……。いいよ、別に」

この前、好きにならないって言われたばかりだ。

このまま見なかったことにして、帰ろうと思った。

「帰ろう、莓花……あれ？」

ふと見ると、今までここにいた莓花の姿が消えている。

キョロキョロと視線を巡らせていると、莓花は涼の傍にいた。

しかも梨々を見て、涼に何か言っている。

ちよつと、待ってよー、と思う間もなく莓花が涼を引っ張って梨々の元へ歩いてきた。

「久しぶり、梨々ちゃん」

笑顔で、なんの躊躇いもなさそうな表情で、涼は梨々に挨拶をする。

「……仕事中でしょ、さぼってていいのっ？」

照れ臭くて、顔が見れないどころか、こんな言い方しか出来ない。莓花は気を利かせてくれたんだろう。梨々たちから離れて、他の

売り場を見ている。

「可愛いね、彼女。梨々ちゃんの友達なんだって？」

涼が莓花を褒めた。

涼まで、莓花なの？

「莓花は彼氏がいるんだから。それに涼よりずっとずっと大人な男しか興味がないんだからね。それにすぐ浮気するから、涼なんか、遊ばれてすぐ捨てられるんだもん」

言い切つて、ふんつとそっぽを向いた。

「ふーん。落としがいのありそうな子だね」

「落とすの？」

涼の言葉に梨々は心がズキンと痛くなる。

やっぱり涼も、莓花を気に入ったんだ。男の人の目には、外見も良くて華やかな社交的なタイプの莓花のほうが、梨々より魅力的に見えるんだろうな。

梨々なんか、特にどうつてことない普通の高校生だ。

恋愛経験もなければ胸もない。

あるのは、モテないって言う事実だけ。

「どうしようかな。梨々ちゃんの許可が下りたらアプローチしてみようかな」

「ダメっ！」

即答した。

誰が許可なんかするもんか。

「そっか。じゃあ、落とすのやめる」

ハハハと笑いながら、涼の手のひらが梨々の頭を撫でる。

「涼……」

今度は胸がキューンと苦しくなった。

「8時に終わるから、地下の『ル・クル』ってカフェで待ってて」「え……」

涼は、じゃあね、と笑って売り場に戻って行った。

涼は、莓花じゃなく梨々を誘ってくれた。

あんなに気まずかったのに、誘ってくれた。

「良い方に考えてもいいんだよね？」

莓花と一緒に売り場から離れるとき、聞いてみた。

「私ならこのチャンス、利用するよ」

「どうやって？」

莓花を見ると、まるで自分が誘われたかのように楽しそうに言った。

「一度は断ったのに誘ってきた涼の真意は、きっと後悔したからだわね。本気で梨々を断るつもりはないと考えられる。少なくとも嫌われてはいないと思うな」

そこでね、と莓花は続けた。

「押すのよ梨々。ガンガン押してものにするのよ」

続く

6 step

8時に言われたカフェでミックスジュースを飲みながら涼を待っていた。

苺花に気合を入れてもらった瞬間は、「良しっ、頑張るぞー」って思えた

けれど、時間がたつにつれ、気合がしぼんでいきそうになっている。早く涼が来てくれないと、気合の欠片も消えちゃうよ。

気持ちを落ち着かせるように、ミックスジュースを飲んだ。

「美味しいな」

気分はドキドキだったけれど、ジュースはバナナベースのミックスジュースで、

ちよつと値段は高かったけれど、それに見合った味だった。

たぶん、オレンジと桃も入ってる。

粉々にクラッシュされたような氷の粒が、ジュースと一緒に

ストローを通して口に入ると、気分までスッキリしてくるような幸せな感覚に満たされてしまう。

「美味しいな〜ホント」

店の人が「いらっしやいませ」と言うたびに、ドキンとして入り口を振り返る。

そうして何回目かのドキンの後、涼が入ってきた。

「いないかと思った」

涼は笑いながら、梨々の前に座る。

「あ、それ美味しいよね」

梨々の目の前のジュースに目を留め、涼は同じものを注文する。

「この店のお勧めジュースなんだ」

涼が教えてくれる。

運ばれてきたジュースを飲む涼を盗み見て、梨々と同じものを飲んでるんだ。梨々のおなかの中と、涼のおなかの中はおなじ物

で満たされているんだ。

などと変な想像をしてみまい、何故だか恥ずかしくなった。

「なんか、赤いよ？ 顔」

ハツとして目を伏せる。

「そ、そうかな。なんか緊張しちゃって」

へへへと子供っぽく笑って誤魔化した。

「なんか、話でもあったの？ 梨々、忙しいのに無理して待ってあげたんだからね」

照れ臭くてそう言うのを、涼はちゃんと見抜いているらしく、軽く笑うと梨々に言った。

「この前はごめんね」

「この前？」

本当は何のことかわかっていたけれど、気にしていると思われなくなくて、とぼけて問い返す。

「うん。梨々ちゃんが真剣に告白してくれてるのに、あんな言い方はなかったよなって、ずっと気になってたんだ」

「……そうだよ。反省したの？」

チラリと上目遣いで涼を見つめる。

「したんだ。梨々ちゃんが連絡くれなくなったのは、やっぱり傷つけちゃったからだろうなーって」

「連絡して欲しかった？」

「ハハッ」

それには答えず曖昧に笑って逃げられた。

「涼は、梨々に言った言葉を気にしてたんでしょ？ 連絡欲しかったんでしょ？ それって、梨々が気になってたってことと同じなの？」

我ながらストレートな聞き方だなあって思った。

でも、曖昧な言葉じゃ涼には逃げられそうなんだ。本当に涼と付き合えるんだったら、これくらいどうってことないよ。

梨々って意外と押しが強かったんだな、と自分でもびっくりだ。

「そうだね、気になっていたのかもしれない」

ストリートに返ってきたから、戸惑った。

「じゃあ、じゃあ涼は梨々と付き合う？」

「俺だけ見てない女は嫌だね」

あっけなくかわされた。

梨々は涼だけ見ているのに、そんな言葉は言われなくなかった。

梨々は、涼の目をしっかりと捉えて口を開いた。

「……それって、大和のこと言ってるんでしょ？」

涼は、梨々が大和と付き合っていると誤解しているから……。

「別れてないんだろ？ 二番目は嫌だから」

「付き合っていないよ、大和とは。大和は尊花が好きなんだもん。梨

々は大和の恋愛相談に乗ってるだけで、ただの友情だもん」

良かった。涼に遮られることなく、今日はちゃんと食べた。

「相談に乗れるくらい、梨々ちゃんって恋愛経験があるんだ」

すごいねって言われたけれど、素直に喜べるはずがない。

間違いなく、からかわれているんだって、わかるからだ。

「バカにしないでよ」

強気で言ったつもりだったけれど、声が震える。

目の前がぼーっとなったかと思ったら、瞳から涙がこぼれる。

「ああ、そんなに嫌だった？」

ちよっただけ、涼の表情が困ったように見えた。

こうなったら泣き落とす？ 泣いて駄々こねて縋って脅迫？

「りっ、梨々はねっ」

ぐすんと鼻をすする。

ヤバイ、鼻水まで出そうだ。

涙は可愛くても、鼻水はきつと引かれちゃう。

バッグからハンカチを取り出し、口と一緒に鼻も覆った。

吸収性が悪いハンカチ。本当はティッシュがいいんだろうけれど、

カッコ悪くて使えない。

「梨々は、涼が好き」

ちよつと、唐突だったけれど、言いたいのはそれだけなんだ。

「バカにされて悔しいし、涼が梨々を想ってないのも知ってる。子供だって思ってるのも知ってるし、梨々が雅人さんの姪だからしょうがなく相手にしてくれてるのも、ちゃんと全部わかってるもんっ」

涼は、梨々の話に口を挟まない。

梨々をじつと真正面から見ている。

梨々のほうが負けそうになった。じつと目を見られて、緊張する。でも、伝えるんだ。

ちゃんと気持ちを全部伝える。

「梨々はじつと本気で涼が好きなんだから」

子供の本気を舐めるなよ！

「お、お母さんに捨てられて、お父さんからも放任されて。この前雅人さんにも見放されたんだから。それに大和は莓花が好きなの。

梨々には涼しかいないんだからっ」

ああ、しまった。……これじゃあ、同情を買っただけ？

「ちよつと、出ようか」

涼が立ち上がる。

「逃げるの？」

「違うよ。ここじゃ梨々ちゃんの声が大きすぎて他の人の迷惑になるだろ」

「あ……」

ふと見回すと、梨々たち注目的になっている。

狭いカフェ内で、梨々の告白、ここにいる人たちにみんな聞かれちゃった？

途端に恥ずかしくなって、誰とも目を合わせないようにして涼の後について店を出た。

涼の車に乗って、また家まで送られた。

車の中で話の続きをするものだと思っていたが、そんな雰囲気じゃなかった。

涼も梨々も、お互い無言のままだった。

「じゃあね、梨々ちゃん」

家の前まで着いてから、何もなかったように涼は言った。

「やだっ、降りないっ」

シートベルトを両手でぎゅっと握り締めてから、首を振った。

「ふうん、ずっとそこに乗ってる気？」

「話が終わってないもん」

「………なんの話だっけ？」

ムツカー！ いい加減にしてよ、涼っ！

梨々を馬鹿にして、そらすのもいい加減にしないと、梨々はマジギレするんだから。

「梨々は涼に告白したの。真剣に告白したのに、あんな言い方はなかったって気になったとか、連絡なくてなんとかだったとか、言ったくせにまた今日も同じこと繰り返す気？ 大人のくせに学習しなさいよね。子供だと思ってバカにして。何回も言われなくてもわかってる。涼は梨々が嫌いなんですよー！」

違う………。

間違えた。

嫌いなんでしょう、じゃないじゃん、梨々。

そっだよ、って言われたらどうするのよ。

「梨々ちゃん」

ああ、言われる。振られるっ。

怖くてぎゅっと目を閉じた瞬間、梨々の頭に何かに触れた。

そっと目を開けてみると、それは涼の手のひらで。

チラッと涼の顔を窺うと、梨々を優しい目で見てくれていた。

「俺、正直……戸惑ってるし、確かに逃げてるよね」

数回、目をパチパチと瞬かせて涼を見た。

「俺が好きになる女ってさ、何故だかみんな、本命がいたんだよね。本命に振り向いてもらえないからって、俺に逃げてくるの。何でかしんねーけど、ずっとそう。いつだって二番目。一番になったことがなかった」

いつだって彼女を切らしたことがないと思っていた。

二番目？

そんなこと、初めて知った。

涼を二番目にキープするなんて、その女たち目がおかしいんじゃないの？ そうよ、きつと感覚が変なのね。

「梨々が、好きだって言ってくれたのは嬉しかった。でも、大和がいるじゃんって思った。またかよって、二番目がよって思ったら……素直には受け入れられないって思ってた」

今こそ梨々の本気を伝えるチャンスだ。

「梨々は涼が本命だよっ、涼が一番！ 涼が好きだもん、大好き。

これまでもこれからもずっとずっと永遠に涼しか好きじゃない。結婚しよう、涼っ」

勢いがついて、梨々ったらプロポーズしてしまった。

涼は、呆れて言葉が出てこないって顔だ。

「涼……梨々は、涼が好き」

「……うん」

「好きなの、好き。本気なんだよ、好きで好きで……。ちゃんと一番に特別に涼が好きだから」

「ったく、好き好き言いき」

涼は梨々からふいつと目を逸らした。

ガーン。

やっぱり言い過ぎたんだ。

呆れちゃったよ、涼……。

「うつつ……」

しかも梨々、泣くなんて、超ウザイよね。

「ごめん、梨々ちゃん」

降りて、と涼に言われる。

「……わかった」

梨々の気持ちは、ウザイとこだけしか伝わらなかったみたい。

梨々は車を降りた。

好きだと言われて嬉しいのは、相手も自分に少なからず好意を持っている場合にのみなんだ。

迷惑な、一方的な気持ちの押し付けだ。

「ちよつと考えさせて」

運転席に座ったまま、涼が言った。

「来週から、北海道なんだ」

「ほっかいどー？」

それって、何？

「氷の祭典ってイベントがあつてさ、仕事で一ヶ月行ってくる。帰ってきたら返事をするから」

それだけ言うと、涼はじゃあねって手を振って行ってしまった。

……ごおり？

……一ヶ月？

「北海道、行くんだ？」

ふらふらと家に入り、ベッドに倒れこんだ梨々は、まるで電池が切れたロボットみたいに動けなかった。

一生分の告白をしてしまったようだ。

パワー切れ。

恋にとどくまで～梨々の恋

何かなんだか、わからなくなつた。

続く

恋にとどくまで～梨々の恋

7
s
t
e
p
(**前書き**)

7 step

「創樹と別れちゃった」

ふふつと笑って梅花が言った。

始業式がすんで、学校の帰りにドーナツショップへ寄っている。

「次は誰と付き合おうかな。ねえ、梨々。梨々のオジサンって独身？」

「雅人さんのこと？」

「そうそう。やっぱり大人がいいよね。いくつだっけ？」

「28歳」

「そっか。微妙に若いけど、11歳差かあ。ま、いつか。紹介してよ」

「雅人さん、意外と固いよ」

梨々は失恋気分を引きずっていると云うのに、梅花はいいなあ。前向きだな。

「そういう人が本気になったら、一直線なのよ。きっと激しく求められるに違いないわ」

梅花つたら、すっかり雅人に気に入られるって前提だ。

大和の気も知らないで。

「あ、そう言えば涼とどうなった？」

「一ヶ月後に返事するって」

「一ヶ月？ 何よその期間は。一ヶ月も待たせといていいと思ってるのかしら。煮え切らない男ね、やめたら？」

「……だよ」

「そうよ。一ヶ月の間にうやむやにする気よ。何よ、ちょっとカッコイイからって何様のつもりよ。こうなったら、梨々も新しい男、探しなさいよ」

大和なんかどう？ と梅花に言われる。

「大和は友達だもん」

まさか、大和の気持ちを莓花に伝えるわけにはいかないだろう。

「だよね、大和だもんね」

「どういう意味よ、それ」

「どうって、大和……バカなんだもん。鈍感だし、女心なんかちつともわかってなさそう」

莓花は口を尖らせた。

大和が聞いたら落ち込みそうなセリフだ。

大和と自分の姿がだぶって見える。

莓花に想いが伝えられない大和と、涼に気持ちを曖昧にされている梨々。

大和も可哀想だし、梨々も可哀想でしょ？

「梨々、カラオケ行こうか」

「カラオケ？」

「暗くなつてないでパーツと騒ごうよ」

本当は騒ぐ気分じゃないんだけど、莓花が大和まで電話で呼び出すもんだから、断れなかった。

たくさん歌ってスッキリしたのは、莓花だけだったようだ。

無理やり呼び出され、つき合わされ、しかもお金まで割り勘にさせられた大和は、やっぱり可哀相だ。

「じゃあねー、梨々。ちゃんと送るのよ、大和」

ヒラヒラと手を振って、莓花がバスに乗って行った。

「莓花、創樹さんと別れたらしいよ」

大和と並んで歩きながら、梨々は大和に教えた。

「知ってる。創樹さんが言ってたもんな。ひつでー言葉で別れを告げられたらしくって、創樹さん落ち込んでる」

「ひどい言葉って、どんな？」

「……下手くそなんだって」

「ああ、そう言えばそんなこと、莓花が言ってたっけ」

「莓花つて、毒舌だよな」

「ハッキリしてるよね」

「自由人だよな」

「そうだね」

「俺じゃあ、相手にされないよなって最近思う」

「まだ莓花を想ってるの？」

「……まあ……。そういう梨々こそどうなってんの」

梨々は、ありのままを大和に話した。

「そっか。複雑」

そうやって話しながら歩いているうちに、梨々の家に辿り着く。

「寄って行く？」

誘ったら大和がうなずいた。

玄関に入ると、そこに父の靴があった。

今日は平日で、まだ5時なのに何でいるの？

「大和、先に部屋に行ってて」

梨々は大和を行かせると、父の部屋を覗いた。

「お父さん、何してるの」

「ああ、梨々」

父は旅行バッグに荷物を詰めている。傍にはダンボールに詰まった洋服があった。

「急に福岡に転勤が決まったんだ。とりあえず身の回りのものだけ持って行く」

「長いの？」

「5年したら戻ってくる」

「……梨々は？」

「一緒に行くか？」

父が梨々をじっと見ている。

こんな風にちゃんと顔を見たのは久しぶりだ。

「行かない。行ったって友達いないし、お父さんは忙しいでしょ？
一人ぼっちになるのは目に見えてるもん。ここにいる」

今までだって、一人暮らしのようなものだった。

友達がいる分、ここにいたほうがマシだ。

「そう言うと思ったよ。雅人には頼んである」

だから何？

雅人に頼んだって、それで済ませるの？

「友達来てるから、部屋行くね」

父は、明日発つとか、連絡がどうとか言っていたけれど、知らない。

イロイロ言われたって行くのは決定なんだし、梨々を置いて行くのも勝手に決めていたんだ。

勝手に早く行っちゃえばいい。

今まで通り、多すぎるお小遣いだけくれていればいいもん。

「あ、梨々。もういいのか？ お父さん何だった？」

部屋に入ると大和が振り返る。

手にはコントローラー。テレビ画面にはドラクエが映っている。

「それ、梨々のゲームなのに、何で勝手にやってるの？」

「あ、ごめん。ヒマだったからさ、レベル上げしたら梨々が喜ぶか
と思って。先には進んでないから大丈夫……」

「もうゲームなんかしないっ」

梨々はゲームのコンセントを抜いた。

「おい、壊れるって」

「いいのっ」

梨々はベッドに倒れこんだ。

「お父さんと、何かあった？」

大和が心配そうな声をかけてくれる。

「福岡に転勤だって。5年も」

「転勤？」

「明日行っちゃうんだって。梨々置き去りなんだよ」

「なんだそれ。梨々まだ未成年じゃん。普通、置いて行く？」

「そう言うひとだもん。梨々のこと雅人さんに頼んだって。けど、

雅人さんとは気まずいんだよ。仕事だって忙しいし、梨々だって頼まれたくない」

大和が黙って梨々の頭を撫でてくれた。

慰めてくれているんだろう。

「大和は、梨々のこと可哀想って思うの？」

「一人になるんだし、淋しいだろうし、心細いんじゃないかな」

「別に淋しいってわけじゃないよ。お父さんが梨々のことを持て余したり、素っ気なくされたりして、愛を感じないのが悔しいだけだもん。お母さんだって、梨々より男を選んで梨々を捨てた。あんな親たちならいらないんだ。一人のほうが気楽」

梨々の思っていることが、ちゃんと大和に伝わっているのかわからない。

「俺がいるじゃん、梨々」

「……うん」

「俺なんかいつもヒマだし、いつでも遊べるよ」

「ありがとう、大和」

胸がじんわり温かくなった。

「あのさ、どうせなら……その、梨々と、その……」

大和が何か言いたげに、梨々をチラチラ見ながら言葉を濁している。

「俺…… 梅花が好きだって言ったじゃん？ 実はあれさ……」

「あ、そうよ。梅花もフリーになったことだし、大和、告白のチャ

ンスだよ」

雅人を紹介してとか言っていたけど、梨々は大和の味方だから紹介してあげないつもりだ。

大和に莓花は手に余るかもしれないけれど、大和が幸せになれるなら協力を惜しまない。

「莓花に告白しなよ」

「……そうだな。うん、そうだよな」

自信がないのか、大和の元気がなくなった。

それから大和は帰るまで、何故だか何度も深いため息ばかりついていた。

涼がない一ヶ月の間、梨々は莓花と大和を交えて、三人で遊ぶことが増えた。

今日も三人でカラオケに来ている。

だけど、梨々は邪魔なんだろうって時々思った。

誘われても梨々が遠慮すれば、大和が莓花に告白するチャンスがきつとあって。

ちよつと莓花も今はフリーなんだ。

大和が告白すれば、もしかすると気まぐれにオーケーするかもしれない。

そうだ。

今日は用事があるからと言って、先に退散するでしょう。

「あ、もしもしー」

急に莓花の携帯が鳴って、莓花が誰かと会話を始めたので、大和

が気を利かせてカラオケの曲のボリユームを絞った。

「ハイハイ、オッケーです。行きますー」

莓花は言っと、携帯を閉じてこっちを見た。

「ごめん、梨々、大和。私、用事が出来たから行くね」

しまった。莓花に先を越された。

「どこ行くの？」

「新しい男になるかもしれない人のところ」

莓花が意味深な笑みを浮かべた。

「1回やったら、わりと上手だったからっ」

ふふつと笑って、莓花は肩をすくめる。

莓花は、エッチの良し悪しで相手を決めるんだろうか。

「じゃあねー、と莓花はカラオケの支払いもせずに、行ってしまった。」

結局、カラオケ代は大和と半分ずつ払ったけれど、お金よりも莓花の行動のほうが大和にとってはショックだろうなって思った。

「ドラクエしてく？」

だから梨々は、大和の好きなドラクエに誘ってあげた。

莓花がしていることに比べれば、梨々と大和がゲームをするくらい可愛いものだ。

何でもないようなことなのだ。

続きます。

「その後、新しい彼になるかもの人とはどう？」

大和の気持ちを考えて、梨々はさりげなく莓花に探りを入れた。

「あー、あれね」

学校の帰りに、ファーストフードの店に寄っていた。

莓花はシェイクをストローで一口飲むと、梨々をチラッと上目使いで見る。

「女いたから、やめた」

「女いたの？」

「いたのよ。彼女いないとかウソついてさ。そんなに私とやりたかったのかなって感じ。最悪でしょ？ 創樹思い出しちゃったよ」

莓花はハアツとため息をついた。

莓花には悪いけれど、梨々は心の中で「やったー」と叫んだ。

今こそ、大和の良さをアピールするチャンスだ。

大和なら彼女もいないし、ちゃんと莓花のことを好きだと思っているんだから。

「やっぱ、若い男はダメだよ。まだ自分が遊びたいわけじゃん？

こっちも遊びたいんだけど、遊ばれるのはイヤよね。はー、そう考えるとやっぱり大人がいいな。早く紹介してよ、雅人さん」

「……ん」

大和をお勧め出来なかった。

大人とは程遠いよね。

雅人と大和なんて、比べなくてもその差は歴然としている。

梨々は、大和のほうが雅人よりいいと思うけれど、きつと莓花に大和は物足りないだろうな。

「で、どうなの？」

ふいに莓花に問われる。

「どうって、何が？」

首を傾げて莓花に問い返す。

「涼のことよ。何か言ってきた？ それとも本当に一ヶ月何も
ままなの？」

「……ないままなの」

涼の言っていた予定の一ヶ月は、もうすぐだ。

あと一週間。

予定通りなら、あと一週間で涼が帰ってくる。そして涼からの返
事がもらえるんだ。

「待ってるつもり？」

「うん。待ってる」

「はー、健気だね、梨々。私だったら適当にやって過ごすな。ちよ
うど大和とか手ごろに側にいるわけじゃん？ やったら案外すつこ
いかもよー」

「だったら莓花がやってみればいいじゃん」
言ってみてやった。

「ええっ……、ダメよ私は。だって、大和は……私なんか相手にし
ないよ。私なんかさ、梨々じゃないしっ」

莓花は、勢い良くシェイクをぐるぐるとかき回している。

何かまずいことでも言ったのだろうか。

莓花はそれきり、怒ったような態度になって、梨々とまともに喋
ってくれなくなった。

たぶん、梨々が何かしでかしたのには、違いないのだろう。

莓花が怒った理由がわからない。

「気まずいまま、約束の一ヶ月が終わった。」

「梨々から連絡するわけには……いかないよね」

「今日も大和とゲームをしている。」

「向こうが返事するって言ったんだろ。梨々からするのは変。ってゆーか、それじゃあ向こうをいい気にさせるだけじゃなか」

「いい気につて……」

大和は画面に目を向けたままだ。

「梨々にこんな想像されてんのにさ、待たせるなんて真似、平気でやってんの。きつとすっげー自惚れてるんだぜ。いい気になってる。俺はこんなにモテるんだぜーって」

とげとげしい大和の言葉だけど、否定する気は起こらない。

だって、大和の言葉にも一理あるなって思ったんだ。

でも、梨々は涼を信じたい。

「そんなに嫌な人じゃないもん。涼は、ちゃんと考えるって言うてくれた。断るつもりだったら、こんなに待たせないよ。考えてくれるんだから、可能性あるんだもん」

大和は振り向き、梨々に冷ややかな視線を向ける。

「何よ」

「いや。梨々つて前向きだなーって思ってた感心してるんだ」

「感心？ バカにしてるんじゃないの？」

言葉がとげとげだもん。

「してねーよ。俺も、梨々の欠片ほどもその前向きさがあれば告白してるのになーって」

「莓花のこと？」

「ちっげーよ、バーカ」

大和は急にコントローラーを床に置くと、立ち上がった。

「帰る」

「何よ急につ」

「急じゃねーよ。もういいんだ、じゃあなっ」

わけがわからない。

急に不機嫌になって、あんな風にいきなり帰るなんて。

苺花もだけど、大和まであんなに怒るなんて、もしかして梨々は気付かないうちに、何かとんでもない言葉を発していたのだろうか。苺花も大和も、何も言ってくれないから、わかんないよ。

「梨々」

次の日学校で、苺花が梨々に声をかけてきてくれた。

「早く紹介してよ、雅人さん。そうしたら梨々と遊んであげる」
交換条件？

それって、紹介しないと梨々とは遊んでくれないってことだろうか。

「絶交したいのっ？」

詰め寄るようにして、苺花に言われ、梨々はついついいうなずいた。
「わかった。紹介するよ」

「やったー、だから梨々って好きなんだー」

廊下の真ん中で、苺花はぎゅーっと梨々の身体を抱きしめる。

だから、みんなクスクス笑って通り過ぎて行く。

梨々の身体に、苺花の胸が、押し付けられているような状態だから、いくら同性とはいっても、何だか変な感じがする。

大きいな、ふわふわだな、苺花の胸。

梨々にはないものだ。

苺花に一度、聞いたことがある。

どうしたら、そんなに大きくなったのかって。

そうしたら、たくさんエッチすればいいの、なんて軽く笑ってかわされた。

梨々も、涼といっぱいしたら大きくなるかな。

そうしたら、莓花みたいに魅力的な身体になれるんだろうか。

「何やってんだよっ、邪魔」

いかにも迷惑だと言っような声が、梨々の後ろから浴びせられた。

「あーら、大和」

先に莓花が大和に気付いた。

梨々の身体を解放すると、大和の前に立って、じーっと顔を見上げている。

「何か文句あるのかよ」

大和がたじろいだ。

「ごめんなさいねー、梨々のこと抱きしめちゃたー」

ふふんと笑って、莓花はくるりと方向転換して行ってしまった。

「なんだよ、あれ」

莓花の後姿を見送りながら、大和が吐き捨てるように言った。

「最近、不機嫌なの」

言ってから大和を見上げる。

「大和も……不機嫌だよね」

「ああ。この前のことだろ。悪かったな」

あっさり「ごめん」と謝られる。

「子供っぽいよな、ダメだな俺も。まだまだ感情のコントロールが出来てない」

前髪をかきあげながら、大和が、はあっとため息を落とす。

「大和、仲直りのしるしにドラクエしに来る？」

窺うように聞いてみると、大和は嬉しそうに笑ってくれた。

やっぱり、大和はドラクエが好きなんだな。

今日は、莓花を雅人に会わせる約束だった。

学校帰りに雅人の会社に、莓花と寄った。

雅人とはまだ、気まずいままだ。だから連絡をしないまま、いきなり訪ねた。

莓花を紹介して、さっさと退散するつもりだった。

莓花なら取り残したって、きつと自分で何とかするに決まってる。

梨々がついていなくたって平気に決まっているからだ。

「こんにちは」

いつもより小さな声で、ちゃんとノックをしてから扉を開ける。

「おお、梨々っ」

雅人は梨々に気がつくくと、ぴゅんつと入り口まで飛んできた。

「ああ良かった。梨々に連絡しないと思ってしていたのに、なかなかできなくてすまなかったね。でも梨々から来てくれて嬉しいよ…

…あれ？」

雅人は、梨々の後ろにいる莓花に気付いたようだ。

「あ、友達の花」

紹介すると、雅人は「ああ」と、満面の笑みを浮かべて莓花に向き合った。

「梨々からいつも話は聞いてます。そうか、キミが莓花ちゃんかあ」

雅人をじつと見ていると、莓花の顔と胸元に視線が往復しているのが、目に見えてわかった。

「あのさ、雅人さん」

梨々は唐突に言った。

「梨々ね、今日は用事があったって忙しいの。だからお願い、莓花と遊んであげて」

「え、梨々……」

雅人が何か言う前に、梨々は二人の前から逃げるように立ち去った。

苺花と雅人がどうなったのか、気にする間もなく、翌日苺花のほうから教えてくれた。

「エッチしちゃった」

梨々、言葉に出来なかった。

放課後の帰り道、歩きながら苺花は、道の真ん中でくるくる回るような勢いではしゃいでいる。

「付き合うことになったの。このままだと私、梨々のオバサンになっちゃう。どうしよう」

どうしようなんて思っていない風だ。面白くてたまらないって感じに見える。

正直に言って、苺花には呆れた。

もちろん、雅人にもだ。

梨々が、涼と遊ぶだけであんなに怒ったくせに、自分だってしっかり高校生に手を出してるじゃん。

「事務所で話しているうちに、何だかエッチな雰囲気になってきたのよ」

聞かないのに、苺花は勝手に話してくれる。

「雅人さんって、ステキですねって言ったら、苺花ちゃんも可愛いね。だって言うからさ、じゃあ付き合ってくださいですかってストレートに言ったわけ。そうしたら、ちょっと考え込むような素振りを見せた。すかさず私のほうから抱きついてさ、軽くチュッてしただけで押し倒されたわ」

雅人がそんな獣だったなんて。

身内のそう言う話って、他人の話を聞く以上にリアルで気持ち悪い。しかも相手が莓花。

それに、会社でしょ？ あの事務所の空間でそんなことをするなんて。

する前って、シャワーをするものじゃないの？

あの会社に、シャワーなんかついてなかったはず。

いくら冬でも、汗はかいているんだし、梨々だったら絶対イヤだな。

「やった責任はちゃんと取るからって、真面目な顔で言うもんだから、ちよつと引いちゃった。結婚でもしてくれそうな勢いだったよ」
アハハと面白そうに、莓花は笑う。

「まあ、しばらくは付き合ってみる。エッチはまあまあだったな」

「しばらくって、真剣に付き合おうって気はないの？」

あんまりだと思ったんだ。

最初からその程度の気持ちで付き合うなんて。

会ってすぐエッチするのめどうかと思うし、それに……。

……それくらいの気持ちで付き合えるなら、大和と付き合っただければいいのに。

でも、大和が莓花に遊ばれるのも可哀相だ。きつといいように利用されて、パシリにされてしまうに違いない。

だったら、大和は梨々が……。

「真剣になれるような男が、他の女しか見てないのよっ！」

急に莓花が怒り出す。

「莓花？」

びっくりして梨々は足を止めた。

「あ、ごめん梨々……。梨々に怒ったつてしようがなかった」

ハツとしたように莓花はすぐに謝ってくれる。

「もしかして、莓花。本命がいるの？」

その男は誰か別の女を好きなんだ、きつと。

「そうよ。だから、彼以上の男を……捜してるんじゃないよ。なのに、ちっとも満たされないよ」

「葛花がうつむき、今にも泣き出しそうに震えてる。」

「告白……したの?」

「おそろおそろ聞いてみると、葛花はうつむいたまま、小さく首を横に振った。」

「出来ないよ。断られたら私、死んじゃう」

「死んじゃうって、そんな……」

「誰にでも簡単に好きだって言っただけで、簡単にエッチして、付き合っただけで別れてって繰り返していた。」

「その葛花が、振られたら、死ぬなんて。」

「死んじゃうの。恥ずかしくて恥ずかしくて。本当に死んじゃうくらい落ち込むに決まってるの。だから、見るだけでいい。好きな女と、幸せになっただけでいいと思っただけ。その女って、すごい鈍感なの。大和の気持ちなんかちっともわかってない」

「そっか。鈍感なんだね」

「あれ? 何だか違和感。」

「葛花を見ると、両手で口元を覆って、激しく首を横に振ってる。」

「どうしたの、葛花」

「ななな、何でもないっ。よ、用事、思い出したから帰るねっ」

「そう言っただけで葛花は、逃げるように梨々を置いて帰って行った。」

「……あれ??」

「また梨々は、葛花に変なこと、言ったのかな。」

「もしかして、また怒らせました?」

9 s t e p (後書き)

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。
次回は、ファイナルステップです。最終話になりますので、よろし
かったら是非読んでくださいね。

ファイナルstep(前書き)

とうとう最終話になりました。

他のstepより少し長めですが、一気にラストまで読んでいただけると嬉しいです。

ファイナルstep

家に帰ると、玄関の前に大和が座り込んでいた。

「大和、梨々を待ってたの？」

声をかけると、大和が顔を上げて梨々を見た。

「うん。待ってた」

大和は言って、立ち上がりながらジーンズについた砂埃をはたく。チラリと視線を移すと、大和が乗ってきたらしい自転車が止めてあった。

すでに私服だし、1回帰ってから自転車で来たのだろうとわかる。「ドラクエ……。魔法のじゅうたんがどこにあるか、わかんねーって梨々が言ってたじゃなか。教えてやるうと思っただ」

「ありがとう。そうなの、見つからなくて困ってた」

笑って大和を部屋にいれようとしたが。

「あのさ、梨々」

「どうしたの、大和。早く入りなよ」

玄関先で靴も脱がないまま、大和が梨々をじっと見つめる。

「俺と付き合って、梨々」

「……え？」

大和の言った言葉の意味が、すぐには理解出来ず、梨々は固まった。

「好きなんだっ。彼女になって、梨々」

「え……あっ」

腕をぐいっと引っ張られたかと思うと、梨々の顔と大和の身体がぶつかった。

背中に大和の腕が回って、梨々は大和に抱きしめられたって気付いた。

「ウソなんだ」

「え……え??」

何が何だか混乱してた。

「梅花をスキって言ったの。あれ、嘘だったんだ。ホントは梨々が好きだったんだけど、梨々は涼ってやつのことしか眼中になかった。俺の気持ちなんかちっともわかってない。そんなのに、梨々が好きなんか言えなくて、つい照れ隠しだったんだ。梅花は好きじゃない。梨々の友達だから話はあるけど、そうじゃなかったら苦手なタイプだし話しもしてないよ」

一気に大和に告白……だよ。告白されちゃった？

いくら鈍感な女の子でも、こんなに抱きしめられて好きって言われれば、大和の気持ちに気付くよ。

……ん？

鈍感な女の子？

梅花が言った。

……大和。

「あ……」

梅花が言った……大和の気持ちに気付かない……鈍感な女の子……

「梨々だったのっ？」

気がついて、びっくりして梨々は大和の身体を両手でぐいーっと押した。

そして目の前で梨々を見下ろしている大和をじっと見つめる。

「大変だよ、大和」

「え……大変？」

大和が首をかしげる。

「そっだよ、梅花は大和が好きなのよ」

「へ……？」

「良かったじゃん、莓花と両思い……って、あれ？」

梨々、再び混乱した。

「あの、何言ってるんの、梨々」

大和に怪訝そうな目で見られる。

「……そっか。そうだったんだ」

頭の中で、整理した。

莓花が好きなのが、大和。

大和が好きなのが、梨々。

梨々が好きなのが、涼。

涼が好きなのは、……？

「あれ？」

再び、梨々はパニックになった。

「梨々、涼が好きなのが誰かわからないの」

「……なんだよそれ。意味わかんねー。それより梨々、俺さー今、

梨々に告白したつもりなんだけど、届いてない？」

梨々から時々視線を外すような仕草で、大和は怒ったような表情

で続ける。

「莓花の話とか、涼の話は今どうでも良くね？俺の話をもっと真

面目に受け取って欲しいんだけど、無理？」

「うん。それはそうなんだけど」

「俺の告白なんか、考えるまでもないってこと？それよりもっと

大事なことを、梨々は考えてる。そりゃそうだよな。俺にとってはず

っと考えていた気持ちだけど、告われた梨々にしてみればいきなり

だし、俺は莓花を好きだと思われていたんだし、驚くのも無理ない

し……」

大和がイロイロ説明している言葉が、梨々の耳を通り抜ける。

ちっとも理解出来ないくらい、梨々は混乱していた。

「で、結局のところ俺は梨々に告ったものの、砕けるんだろ、涼が好きなんだし、それは承知の上だった。言わずにいるの、苦しくな

ったんだ。友達のまままでこうして遊んでるのも楽しいけどさ、辛いんだ。だからいつそ、当たって砕けるって気持ちだった。だからいいよ。言ってすっきりしたし。梨々に俺を好きになってももらえる確率、ゼロに等しいってわかったし」

「……大和、梨々は……」

「涼ってやつの返事、もうすぐもらえるんだろ？ いい返事だといいな」

大和は泣きそうに一瞬顔を歪めたけれど、無理やり笑顔を作ると、じゃあなって言って自転車に乗って帰ってしまった。

大和の姿が見えなくなると、何だか寂しくなった。

梨々って鈍感。

「梨々」

梨々の心の声と、誰かの言葉が重なった。声のしたほうに顔を向ける。

「涼……」

一ヶ月ぶりに見る涼の顔。

梨々の目の前に、梨々の好きな涼がいる。

「悪い。声かけられなかった。なんか、大事な話をしていたようだったから」

「いつからいたの？」

「梨々が帰ってくる前から、そこに」

涼が指した方向に、涼の車が止まっている。

「声は聞こえなかったけど、抱き合ってたのは見えた。ずっと見られていたんだ。」

「見ないでよ」

「見えたんだよ。車に気付けよ」

「気付く前に教えてよ」

「邪魔しちゃ悪いつて思つて、遠慮したんだ。あれが大和？」

「大和だよ」

「付き合つてんの？ 俺が待てなくて付き合つちゃった？」

涼がそう思うのも無理はない。

だつて、大和に抱きしめられていたんだ。

「付き合つてないよ。大和が勝手に抱きしめたただけだもん。梨々のことが好きなんだつて。でもね、梨々は涼が好きだからちゃんと断つたんだからね」

梨々は、涼が口を挟むスキがないくらいに一気に捲くし立てた。

「いいじゃん、もう断つたんだし。それより涼、梨々に会いにきたんでしょ、返事でしょ、早く言いなさいよ」

「会つていきなり言えつて？ 梨々ちゃん、意外に気が短いね」

「だつて、こんなに待たせておいて……その上まだ待たせるなんて、……何とかの生殺しつてゆーのよ」

なんだつて。

「そうだね。ごめんね、一ヶ月も保留にしてて」

「そうよ！」

何の生殺しだつて。

「ちよつと軽くドライブしない？」

「……いいけど」

嬉しい。涼とドライブなんて。

大和の告白に驚いたし、大和が帰ってしまったってちよつとだけ悲しかったけれど、感傷に浸る間もなく涼に会えてしまったから、大和のことを考える余裕がなくなってしまった。

ごめんね、大和。

大和の気持ちは嬉しかったけど、梨々はやっぱり涼がいいんだ。

都市高速に乗って、西の海岸へたどり着いた。

夜になるとライトアップされるタワーが近くに建っている。

車を駐車場に止めてから、涼が言った。

「俺ってさ、付き合ったら違ったって言われるんだ。なんか俺、クールなイメージあるみたいんだけど、実際違うから。軽く付き合えそうとか、遊び相手程度に扱われるんだ。いつも俺のほうがはまって、本気になったら捨てられる」

そう言うの、嫌だからさ、と涼は前置きするように梨々に言った。前置きはいいから、早く付き合うかどうかどうするかを言って欲しいのに。

ちよつとイライラしながら、涼の言葉の続きを待った。

「さつき、大和といるのを見たときに、ああ、とつくに大和と出来てたんだって思ったよ。やっぱり一ヶ月は長かったのかなって、少し後悔して……」

「後悔役立たずなんだから、後悔するくらいならさっさと言えばいいのよ」

梨々は頬を膨らます。

「後悔……そうだね。確かに役立たずかも」

涼は笑って、ホントは先にだけどね、と良くわからないことを言った。

「梨々はちゃんと待ってるのよ。今だって、涼に生殺しなのに、待ってるの。早く言って欲しいのよ」

「待っていてくれたんだ、梨々ちゃん」

うなずくと涼は、車の窓を開けた。

外の冷たい空気がすーっと入ってきて、わずかにぶるつと震える。

「あ、ごめん、寒かったね」

再び涼は車の窓を閉める。そして、窓越しにそこに見えるタワー

を指差して見上げた。

「あそこの展望台で、結婚式できるんだ」

「結婚式？」

急に何なの？

戸惑う梨々に、涼は微笑みかけてくれる。

「あそこで、結婚したいって前に付き合った彼女に言ったんだ」

「……涼が、言ったの？」

「そう。そうしたら鼻で笑われた。夢見すぎだって」

思い出したのか、涼は遠い目をして苦笑いをする。

梨々はタワーを見上げた。

まだ夜と言うには少々明るいのが、夜になるとライトアップされるタワーのキレイなことは、見たことがあるから知っている。

「梨々はどう言う？ バカみたいだって笑う？」

「笑わないよ。梨々だって、あんな高いところから夜景を見下ろしながら結婚式なんて、いいなって思うもん」

「そっか。じゃあ梨々と一緒に俺の夢、叶えようかな」

「へ？」

「へ？」

梨々は涼の顔を、首をかしげつつ見つめてしまった。

「言ったじゃん、梨々。俺と結婚しようって」

「ええっ」

「驚くなよ。自分のセリフだろ。それともあれは、その場の思いつき？ 嘘だった？」

「そそそ……そんなことないっ」

梨々は大きく左右に首を振る。

「永遠に、俺が好きって言った梨々の声が、あっち行ってる間ずっと頭の中で何度も繰り返し聞こえるんだ。うるさいくらい」

涼は、シートベルトを外すと、左手を助手席の背もたれ部分に回してきた。梨々の背中に触れそうに触れない距離に、涼の温度を感じてしまう。

「ずっと何度もシユミレーションしてた。梨々と付き合ったらどう

なのかなって。ずっと考えたよ」

涼の指が、梨々の髪に触れる。身体がゾクツとする。

心臓が、飛び出しそうに高鳴っている。

「クリスマスに、俺が彼女に振られて。梨々が遊びにきてくれた。思えばあのときすでに意識し始めていたんだろうなって。大晦日の夜に迎えに行ったのだって、物産展のとき、カフェで待ち合わせたのだって、会いたいと思ったからなんだろうなって、今になって思うんだ」

なのに、そらしてばかりでごめんね、と涼は申し訳なさそうに謝ってくれた。

「自信がなかったんだ。いや、自信って言うより、勇気かな？ 次の恋に踏み出す勇気。それから、梨々を信じきれていなかった。言い方は悪いけれど、この一ヶ月間、試したってことになるのかもしれない。梨々ちゃんの気持ちも。そして俺自身の気持ちも」

梨々から見れば、大人に見えて、何でも余裕でこなしているようにしか思えなかった。カッコ良くてカッコイイ涼にも、こんな一面があったなんて。

「もう一回、確認していい？」

涼の目が、じっと梨々の目を捉える。

「大和とはなんでもないんだな？」

「ないっ」

大きくうなずいた。

「俺が、一番？」

「そうだよ、涼が梨々の一番っ」

「ずっと？」

「ずっとずっと永遠に一番だって、い、言ったじゃん」

涼の顔が、梨々に近くなる。

ぐっと抱き寄せられ、少しでも顔を動かせば涼に食べられてしまいそうな距離だ。

「梨々、俺……束縛するよ？」

「い……いいよ。ひ、紐でぐるぐる巻きにして縛ってもいいよ」
声がメチャクチャうわずってしまふ。

「いつも会いたいわって言うよ？ ウザイって言われるくらいしつこくても平気？」

「平気だよ、涼」

「ホントに、一番……だよな？」

「一番！」

しつこく確認され、梨々もそれにちゃんと答えた。

「じゃあ、梨々。約束しよう。あのタワーで俺と梨々、結婚式しよう」

「け……結婚っ？ ほんとなの？」

涼からプロポーズだよ。何これ。夢？

「これ、交換じゃなく改めて買ったんだ」

梨々の指に、涼が指輪をはめてくれた。

クリスマスにもらいそこねたネックレス。それがこんなカタチで返ってくるなんて。

「いつだって、付き合うときは真剣なんだ。結婚したいって考えるなのに、いつだって、叶わないまま振られ続けてきたんだ。もう嫌なんだ、そういうの。梨々も本気じゃないなら断るのは早めにしろよ。じゃなきゃ、俺、放さないよ？」

涼の左手が梨々の後頭部を引き寄せる。と同時に右手も背中に触れた。

涼の腕の中に梨々……入ってる。

「梨々、答えは？」

「あ……有難く受けて立つに決まってるじゃん。梨々の本気なんか涼よりもっとずっとすっごい大きいんだから。涼こそ、梨々に束縛されて逃げられなくなつて、後悔しないようにしなさいよねっ」

「わかった。梨々の本気、全部もらうね」

涼が、梨々の頭ごと抱きしめてくれた。

てつきりキスしてもらえるかと思っていたのに、外れちゃった。

でも、梨々の耳から聞こえてくる涼の規則正しい鼓動が、ちょっとだけ早いと感じて、何だかとっても幸せな気分になった。

「あのね、涼。梨々……」

涼の胸に抱かれたまま、梨々は涼に伝えた。

「進路調査票……書かなきゃいけないくて。それで、梨々……」
「進路？」

涼に、身体を離されてしまった。不審げに見つめられる。

「進学するの、やめたくなった。梨々……それに涼って書こうかな」
「こんなことを言えば、笑われるか呆れられるかのどちらかだと思うのに、涼はそのどちらとも違う反応で返してくれた。」

「いいよ。俺に永久就職って、書いとけ」
冗談ぽく涼が笑う。

両親に放任されて、ずっと寂しかった。

だけど、もうひとりじゃない。

ずっと憧れていた涼の腕の中で、梨々は幸せな気持ちでいっぱい満たされていた。

涼の全部を独り占め出来るんだ。

これからずっと、一生涼を見ていても怒られないんだ。

こんな幸せなことが、夢みたいなのが現実になった。

「梨々の恋、涼に届いちゃったね」

梨々が言うと、涼は俺の恋だつてそうだよって笑ってくれる。

「これからが大事なんだよな。想いが通じ合うことばかりにとらわれてたけど、これから、どう続けていくか。長く一緒にいると、嫌なことにもきつと突き当たる。それをどう乗り越えるかが大事なんだよな」

物語だと、ここでハッピーエンドなんだけど。梨々と涼は、ここからもちゃんと続編が待っているのだ。

たいてい、続編は何らかの事件が起こるんだ。だけど、たいてい、それを乗り越えて、より深いつながりがもてるんだ。

そんな風になりたいと思う。

そしていつか、梨々はきつと、幸せな家庭を作る。

涼と一緒に。

ふたりだったら、きつと幸せにも届くだろう。

涼がくれた指輪が、幸せな未来を約束するよって言っているように、梨々の薬指でキラリと光った。

感想をお聞かせいただけると、嬉しいです

ファイナルstep(後書き)

大和にはかわいそうなことをしてしまいました。また別のお話で幸せにしてあげようと計画中です。

拙い文章ですし、わかりにくい箇所も多々あったと思いますが、最後まで読んでくださりありがとうございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3126c/>

恋にとどくまで～梨々の恋

2008年11月7日07時36分発行